

専門講義の授業分析（第2報）：スポーツ経営管理学のケース

豊村 伊一郎¹⁾

Class analysis concerning the special lecture (No2): In the case of Sport management (Sports-Keiei-Kanri-Gaku)

Abstract

In this study, I tried to analyze and evaluate my college lectures by using questionnaires in order to improve my teaching methods and grasp the students' ways of thinking, attitudes, actions in class, etc. This was a second survey, so I intended to compare it with the former one.

The main findings are as follows:

- Concerning lecture content, male students thought it was more difficult than female students. This trend was the same as the former survey.
- Regarding the understanding of lectures, the ratios of males were pretty much lower than those before.
- In the case of listening will for the lecture, male students' will was much more decreased than in former ones.
- Regarding the taking of nap in class, the napping rate dropped for female students and rose for the male students, while with private talk, the rate of females was extremely lower than the last survey. The reason came from assuming reserved seats.
- That is natural, though. In the areas of understanding, listening will, thinking effort and what a person gets from the lectures, there were close relationships among them.
- In response to the question "Are you living your student life to the full?", both students' rates were a little bit lower than the last survey.

I. はじめに

マネジメントに関しては、昨今、経営学の泰斗、ドラッカー教授の理論を面白く脚色して作られた、スポーツドラマ「もしドラ²⁾」が書籍およびテレビでブームを巻き起こしている。その一方で、「マネジメント信仰が会社を滅ぼす」というようなショッキングな本も出版されている¹⁾。い

ずれにせよ、組織および個人がより良く機能するには不可欠な理論（知識、技術）ではあるが、その捉え方には多様性があるし、その理論は特効薬ではない。それを踏まえて、いかに各自の、物事に対する見方、考え方を確立していくかが肝要である。

さて、前回(2009)、初めて自己の担当する授業に関する分析を試みて小論にまとめた³⁾が、

1) 福岡大学スポーツ科学部
Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science

今回はその続報である。前回との比較をするとともに、より深い考察のため、各項目間のクロス分析も実施してみた。さらに講義の初歩的な内容理解にまで踏み込んだ若干の調査を行い、その実情を把握することも試みた。

Ⅱ. 研究方法

- 1) 講義科目：スポーツ経営管理学（以下、SKK）、2年次開講選択科目
- 2) 調査期日：2011年1月13日（最終授業時）
- 3) 対象：F大学S科学部の当該授業受講生
 - ・調査時回答者：男子107、女子38計145名
 - 授業時、出席者全員にアンケートを配り、終了後回収した。なお無記名で成績には一切関係しないことを伝えた後、実施した。アンケートはすべて単一回答方式である。
 - ・主として、質問項目は4段階尺度で回答を求めた。その際、段階4と3は原則として、肯定的、2と1は否定的回答とみなした。
- 4) 分析の視点
 - ・講義内容について：講義の難易度、理解度、有益性の有無
 - ・授業中の姿勢・態度：傾聴意欲、思考努力、思考能力鍛錬
 - ・授業での行動：居眠り、私語
 - ・講義の具体的内容に関する事項：マネジメントの必要性の自覚、マネジメントの活用、経営管理の過程、その他
 - ・受講学生の現状：自己管理の状況、現在の努力有無、学生生活の充実度等
- 5) 統計的処理方法：SPSS(Version15.0J for Windows)を用いてクロス集計を行った。

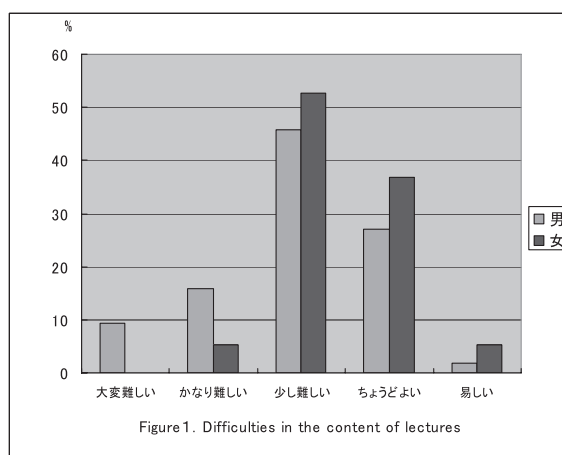
Ⅲ. 結果と考察

1. 男女別の比較

1) 講義の内容について

まず、「講義の難易度」については、内容が「大変難しい」と捉えている者が男子に9.3%、女子は0%、「かなり難しい」と考えている学生が男子に15.9%、女子に5.3%存在している。「少し難し

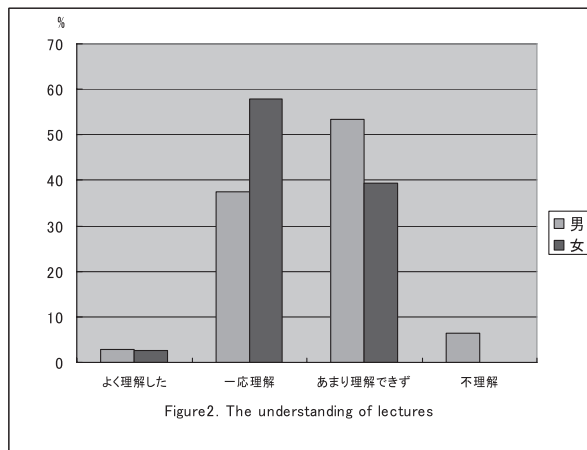
い」と考えている者が、男子45.8%、女子52.6%であり、難しいと考えている者は、併せると男子71.0%(前回調査¹⁾；68.6%)、女子は57.9%(前回；57.5%)を占めている。また、講義内容の難易度が「丁度よい」と考えている者が男子27.1%、女子36.8%であった。さらには講義内容を「易しい」と捉えている者は、男子1.9%、女子5.3%である。(Figure-1)



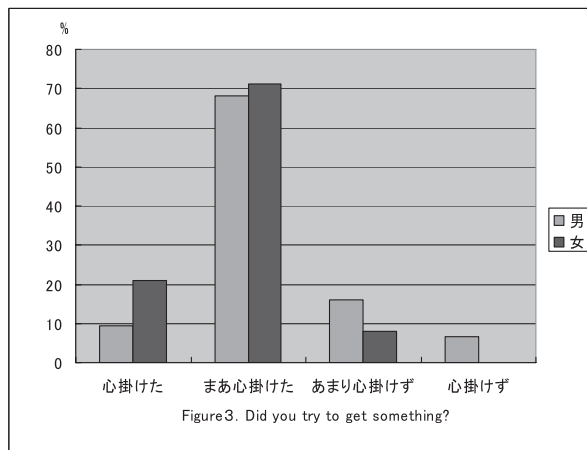
前回(平成21年度)の調査と比較してみると、今回も男子の方が講義を難しいと捉えている比率が高い傾向にある。また今年度は難しさのランクを3段階に分けたが、その結果「少し難しい」が男女共多数を占め、全体に占める割合は男子、63.5%、女子、63.6%であった。つまり、講義を難しいと捉えた男女学生の6割強のものが「少し難しい」に集中している。

全体を通じての「講義の理解度」では、「よく理解した」は、男子2.8%(前回；19.0%)、女子2.6%(7.7%)で、「一応理解した」は男子37.4%(前回；44.8%)、女子57.9%(59.0%)であり、総じて理解に肯定的なものが男子40.2%(前回；63.8%)、女子60.5%(66.7%)であった。逆に全く「理解できない」ものが男子のみに6.5%(前回；6.7%)、「あまり理解できず」が男子に53.3%(前回；29.5%)、女子に39.5%(28.2%)であった。特に、今年度(2010)の男子は6割が講義の全体的な理解に否定的(段階1+2)である。(Figure-2)

2) 授業中の構え・態度



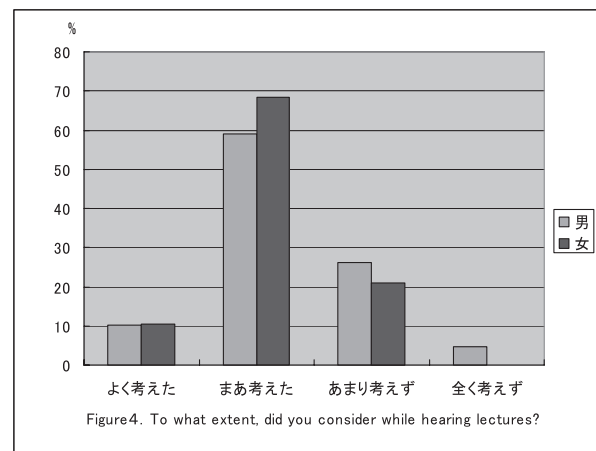
“傾聴意欲”つまり何かを得ようとして聞いたかでは、「よく心掛けた」もの男子 9.3%(前回 ; 30.5%)、女子 21.1%(15.0%)、「まあ心掛けた」もの男子 68.2%(前回 ; 42.9%)、女子 71.1%(67.5%)であり、締めて傾聴意欲に肯定的なものは、男子 77.5%(前回 ; 73.4%)、女子 92.2%(82.5%)であった。それに対して「あまり心掛けなかった」もの男子 15.9%(前回 ; 20.0%)、女子 7.9%(17.5%)、全く心掛けなかったものは男子のみに 6.5%(前回 ; 6.7%)であった。(Figure-3)。この項目に関しては、特



に目を引くのは「心掛けた：段階4」という回答が、前回に比べ、男子で 21.2 ポイントの減少が見られる点が挙げられる。男子において、傾聴意欲は一応肯定的な比率 (4+3) は前回よりも少し上回っているが、よく心掛けたものの比率の下落が講義理解率の減少に結びついたものと考えられる。

つぎに“思考努力”すなわち、どの程度自分の頭で考えながら聞いたかでは、「よく考えた」もの、

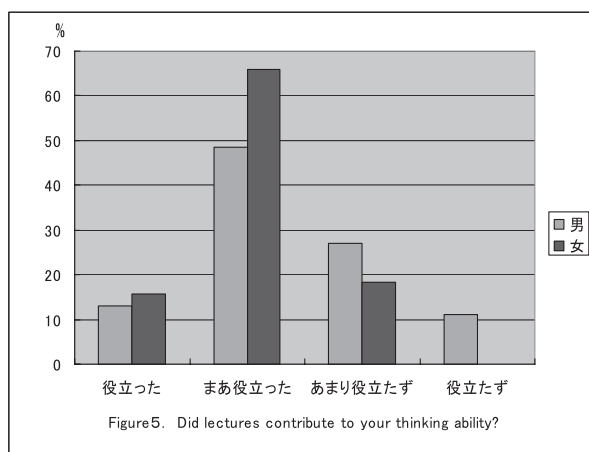
男子 10.3%(前回 ; 25.7%)、女子 10.5%(7.5%)、「まあ考えた」もの、男子 58.9%(前回 ; 50.5%)、女子 68.4%(55.0%)である。すなわち、考えることに肯定的な回答をしたものが、総じて男子 67.5%(前回 ; 76.2%)、女子 92.2%(62.5%)であった。それに対して「あまり考えなかった」ものが男子 26.2%(前回 ; 20.0%)、女子 21.1%(35.0%)、全く「考えなかった」ものが男子に 4.7%(前回男子 ; 3.8%、女子 2.5%)であった。(Figure-4) この設問にお



いても、男子は「よく考えた」ものの比率が、前回に比べ 15.4 ポイント下落している。それに対して女子は前回に比べて考えた比率が、締めて 16.4 ポイント上がっている。

さらに“思考鍛錬”つまり、この授業は考える力を鍛えるのに役立ったかという問いに対しては、「役立った」男子 13.1%(前回 ; 30.5%)、女子 15.8%(12.5%)。「まあ役立った」男子 48.6%(前回 ; 45.7%)、女子 65.8%(67.5%)、総じて役立ったことに肯定的なものが男子 61.7%(前回 ; 76.2%)、女子 81.6%(80.0%)であった。逆に「あまり役立たず」と回答したものが男子は 27.1%(前回 ; 19.0%)、女子は 18.4% (17.5%)、全く「役立たず」は男子のみ、11.2% (前回 ; 男子、4.8%、女子、2.5%)であった。(Figure-5) この項でも、男子の今回の結果では、前回に比べ「役立った」という回答で 17.4 ポイントの減少が見られる。

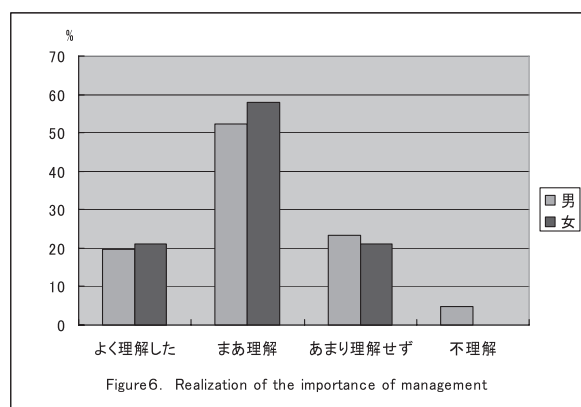
ここまでみてきて、特に男子は、傾聴意欲、思考努力、思考鍛錬に関して前回よりもその比率が下がっていることが明らかになった。これらが理



解度下落の要因として考えられる。

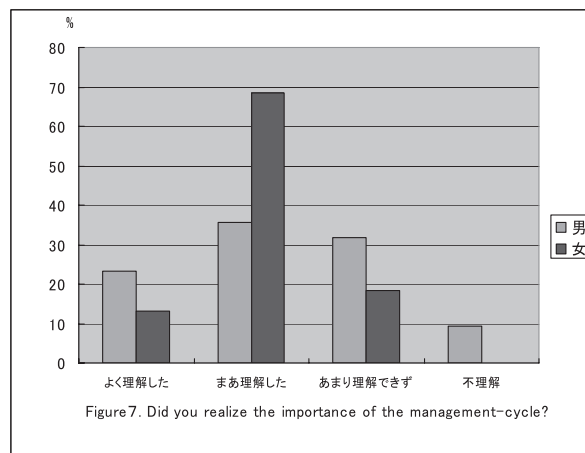
3) SKK の具体的内容理解について

今回、はじめての試みとして講義の具体的内容の理解に関する若干の設問を設けてみた。まず、SKK の講義を通して“管理の不可欠性”つまり、マネジメントが個人にも、組織にも必要不可欠であることを理解できたか否かに関しては、「よく理解できた」もの男子 19.6%、女子 15.8%、「まあ理解できた」男子 52.3%、女子 57.9% で、理解に肯定的なものは男子 71.9%、女子 79.0% である。それに対し、「あまり理解できず」は男子 23.4%、女子 21.1% であり、全く「不理解」なもの男子にのみ 4.7% であった。(Figure-6)

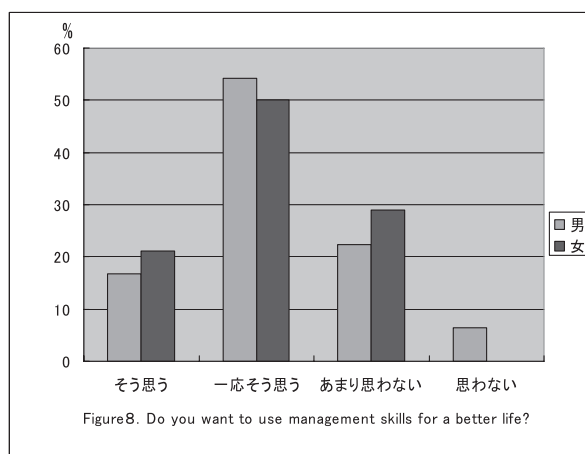


“マネジメントサイクル⁴⁾”の重要性についての理解に関しては、「よく理解した」もの男子 23.4%、女子 13.2%、「一応理解」したもの男子 35.5%、女子 68.4% であった。併せて肯定的なものは、男子 58.9%、女子 81.5% である。他方、「あ

まり理解せず」は男子 31.8%、女子 18.4% であり、全くの「不理解」は男子にのみ 9.3% であった。(Figure-7)

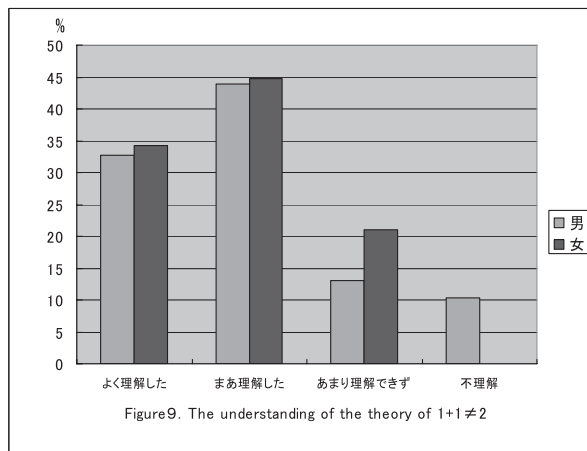


さらに講義を通じて“マネジメントの発想、手法を活用して自分の生き方をよりよいものにしようと思うか”という実践に関する問いに対しては、「そう思う」もの男子 16.8%、女子 21.1%、「一応そう思う」もの男子 54.2%、女子 50.0% である。肯定的なものは極めて、男子 71.0%、女子 71.1% である。それに対して「あまりそう思わない」ものは男子 22.4%、女子 28.9% で、全く「そう思わない」は男子に 6.5% であった。(Figure-8)

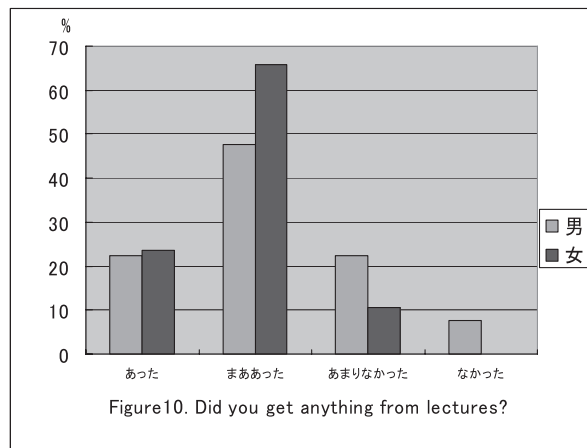


つぎに、大学受験までの試験問題には必ず正解が存在している。また、自然科学の世界では 1 と 1 を足すと 2 になることは自明のことである。しかし人間の織り成す社会現象のなかには 1 たす 1 は必ずしも 2 にならない、言い換えると正解のないものや立場や時代によって答えが異なる問題が

存在している。つまりこういう考え方を $1+1 \neq 2$ の理論とする。このようなことは経営管理の世界にも当てはまる。こういったことへの理解についての回答は、「よく理解した」もの男子 32.7%、女子 34.2%、「まあ理解した」男子 43.9%、女子 44.7%、総じて、男子 76.6%、女子 78.9% のものが理解に肯定的である。それに対して「あまり理解できず」は男子 13.1%、女子 21.1% で全くの「不理解」は男子に 10.3%(11名)であった。(Figure-9)



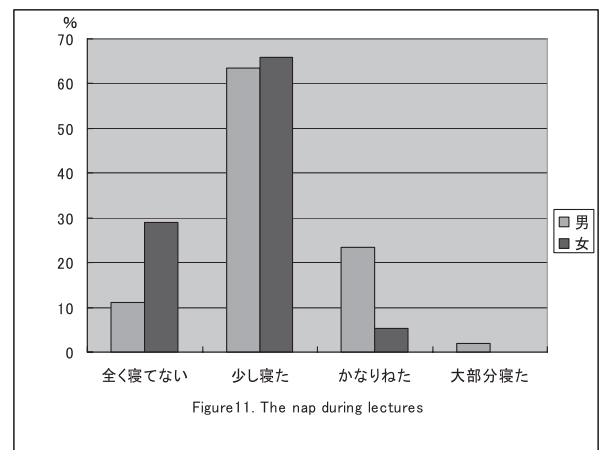
ここで SKK の講義を全般的にみて、“得るものがあつたか”という点に関しては、「あつた」男子 22.4%(前回; 41.0%)、女子 23.7%(17.9%)。「まああつた」男子 47.7%(前回; 45.7%)、女子 65.8% (61.5%)。併せて肯定的なものは男子 70.1% (前回; 86.7%)、女子 89.5% (79.4%) である。他方、「あまりなかった」男子 22.4%(前回; 8.6%)、女子 10.5% (17.9%) で、全く「なかった」は男子のみに 7.5% (前回; 男子、4.8%、女子 2.6%)



であった。(figure-10) “講義で得たもの”に肯定的な者の比率が前回に比べ男子で 16.6 ポイント下がったのに対し、女子で 10.1 ポイント上昇している。

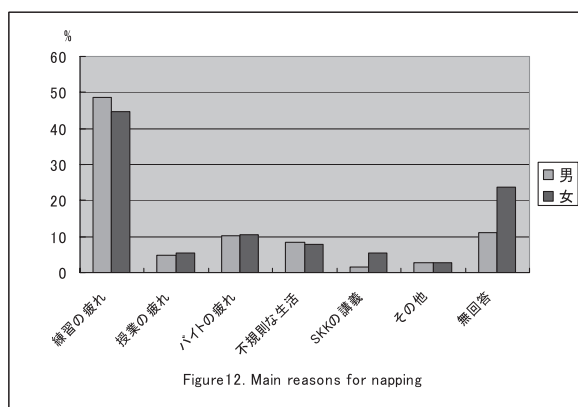
4) 授業中の行動

“授業中の居眠り”については、全く「寝てない」もの男子 11.2%(前回; 23.5%)、女子 28.9%(前回; 25.0%)、少し寝たもの男子 63.6%(前回; 47.1%)、女子 65.8% (前回; 52.8%)、「かなり寝た」もの男子 23.4%(前回; 21.6%)、女子 5.3%(16.7%)。「大部分寝た」ものは男子のみで 1.9% (前回; 男子、7.8%、女子 5.6%) であった。(Figure-11)



前回に比べ女子においては居眠りが減少しているが、男子では居眠りの割合が増加しており、特に「全く寝ていない」ものの比率が半減している。”居眠りの理由“としては、一番多いのが部活の疲れで男子 48.6% (前回; 45.5%)、女子 44.7%(40.7%) であった。(Figure-12)

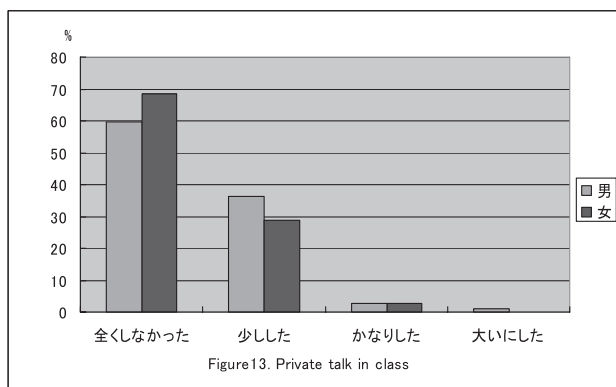
“周りとの私語”に関しては、「全くしなかった」男子 59.8% (前回; 41.9%)、女子 68.4% (22.5%)、「少しした」男子 36.4% (前回; 43.8%)、女子 28.9%(45.0%)、で、「かなり私語をした」は男子 2.8%(前回; 13.3%)、女子 2.6% (30.0%)、「大いにした」は男子にのみ 0.9%(前回; 男子、1.0%、女子、2.5%) であった。(Figure-13) 一見して分かるように、前回調査に比べて私語の割合が大幅に減少している。その理由は、出席簿順に座席を



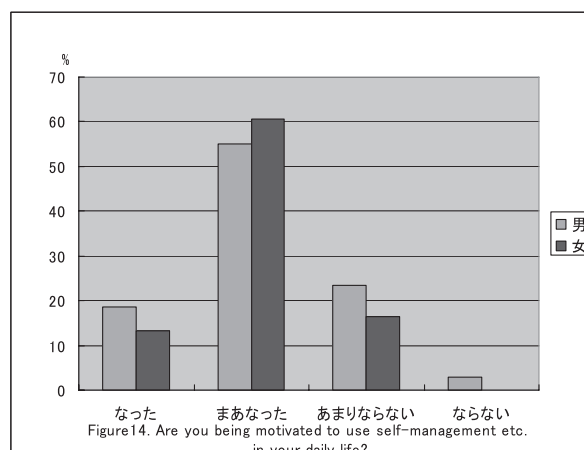
指定したことによるものと考えられる。その際、前から2列は空席（16席 x 2列）にして、3列目より着席させた。これは指定された席が不都合な者は、希望すれば前の席で受講できるための措置である。しかし、座席変更の希望者は皆無であった。

5) 受講学生の現状

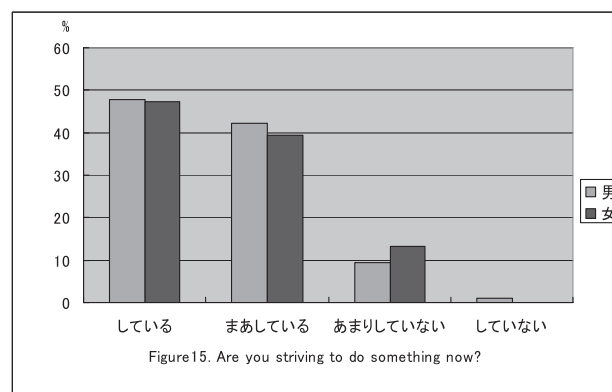
学生生活で“自己管理を心掛けるようになったか”という設問では、「なった」男子 18.7%（前回；27.6 %）、女子 13.2%(17.5%)、「まあなった」男子 55.1%（前回；41.9%）、女子 60.5%(47.5%)であり、総じて肯定的なものは、男子 73.8%（前回；69.5%）、女子 73.7%（65.1%）である。他方「あまりならない」男子 23.4%（前回；24.8%）、女子 16.3%（27.5%）で、全く「ならない」は、男子のみで 2.8%であった（前回；男子 5.7%、女子 7.5%）。(Figure-14)



現在、“何かに集中して努力しているか”という問いに対しては、「している」男子 47.7%(前回；

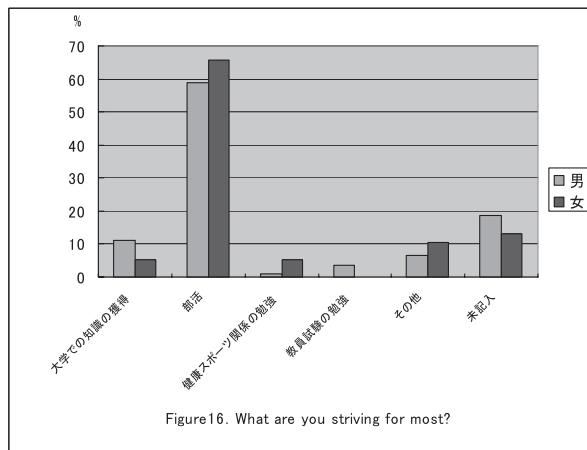


56.9%）、女子 47.4%（50.0%）で、「まあしている」男子 42.1%(前回；27.5%)、女子 39.5%（42.5%）、努力に肯定的なものは、男子 89.8%（前回 84.4%）、女子 86.9%（92.5%）であった。それに対して「あまりしていない」男子 9.3%（前回；11.8%）、女子 13.2%（7.5%）であり、全く「していない」は男子のみに 0.9%であった（前回；男子 3.9%、女子 0.0%）。(Figure-15)

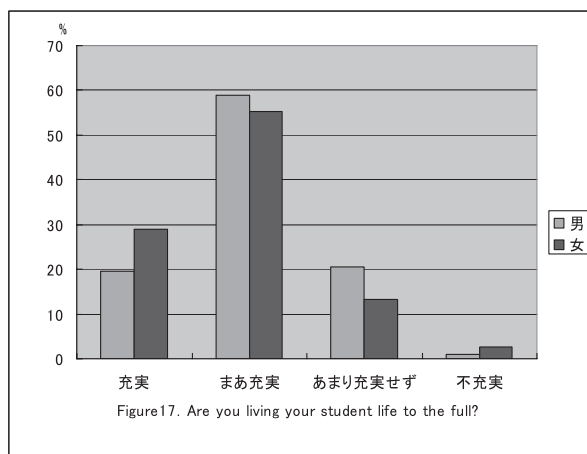


努力している人は“その対象”を質問したところ、男女とも部活動に一番力を入れているものがそれぞれ、58.9%、65.8%であった（前回；男子 51.9%、女子 54.8%）。(Figure-16)

おわりに、“学生生活の充実度”はどの程度かに関しては、「充実」は男子 19.6%(前回；29.8%)、女子 28.9%（40.0%）、「まあ充実」は男子 58.9%（前回；50.0%）、女子 55.3%（52.5%）、総じて充実に肯定的な者は男子 78.5%（前回；79.8%）、女子 84.2%（92.5%）。これは昨年度に比べ男女とも充実に肯定的な割合が下がってお



り、女子では 8.3 ポイントの減少である。特に段階 4 レベルの「充実」をみると、男子では 10.2、女子では 11.1 ポイントの下落がみられる。これとは逆に、「あまり充実していない」男子 20.6%（前回；13.5%）、女子 13.2%（7.5%）、「不充実」は男子 0.9%（前回；6.7%）、女子 2.6%（0.0%）であった。（Figure-17）



2. 項目間のクロス分析

1) 講義の難易度と理解度の関係について

内容が“大変難しい”と回答したものは、10名いるが、うち理解に肯定的なものは3名、理解に否定的なものは7名で、理解できていないものが7割に達している。

つぎに内容が“かなり難しい”を選んだものは、全部で19名いるが、そのうち理解に肯定的なものは2名で、あとは不理解1名を含んで9割弱が理解に否定的である。“少し難しい”では全部で69名いるが、「まあ理解」が29名、「あまり理解できない」が38名で、「不理解」は2名である。この“少し難しい”の範疇では58%のものが理解に否定的である。

一方、講義の難易度が“丁度よい”と捉えているものが全部で44名いるが、そのうち理解に肯定的なものが29名、理解に否定的なものが15名である。この15名は難易度が丁度よければ理解できるはずだが、13名があまり理解できず、うち2名は不理解を選んでいる。

逆に講義内容を“易しい”と捉えているものは5名いるが、各段階をすべて占めていて、内容を「易しい」と捉えているものにも、「よく理解した」ものから全くの「不理解」までが存在する。

以上、講義の内容の理解に肯定的なもので、内容が難しいと捉えているものが締めて34名(23.1%)、内容が丁度よくて理解しているもの29

名(19.7%)である。問題は、内容が丁度よくて理解できないものと、易しいと捉えながら不理解のものの考え方である。(table 1)

2) 理解度と傾聴意欲の関係について

まず講義をよく聴くように“心掛けた”ものは4名のみで、うち「よく理解」は1名、「まあ理解した」が3名であった。つまり全員が理解している。つぎに傾聴を“まあ心掛けた”ものは全部で62名いるが、うち、理解に肯定的なものが95.2%を占めている。逆に、聞くことを“あまり心掛けなかった”ものは全部で72名いるが、うち73.6%のものが理解に肯定的である。さらに、全く傾聴を“心掛けなかった”ものは9名いるが

理解に肯定的なものは30%であった。つまり傾聴意欲のあるものの方が理解率は高い傾向にある。(table 2)

3) 理解度と思考努力の関係について

講義の理解度と思考努力(どの程度考えて聞いたか)との関係をみてみると、まず、“よく考えた”ものは4名いるが、全員が理解に肯定的である。つぎに“まあ考えた”ものは全部で62名いるが、うち71.0%のものが理解に肯定的である。他方、“あまり考えず”では、72名中76.4%が理解に肯定的である。

ここでは、“まあ考えた”グループよりも理解

Table1. The relationship between comprehension rates and lecture difficulty

	N(%)				
	大変難しい	かなり難しい	少し難しい	丁度よい	易しい
よく理解した	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(50.0)	1(25.0)
まあ理解	2(3.2)	2(3.2)	29(46.8)	27(43.5)	2(3.2)
あまり理解できず	4(5.6)	16(22.2)	38(52.8)	13(18.1)	1(1.4)
不理解	3(33.3)	1(11.1)	2(22.2)	2(22.2)	1(11.1)

Table2. The relationship between comprehension rates and the will to listen to lectures

	N(%)			
	心掛けた	まあ心掛けた	あまり心掛けず	心掛けず
よく理解した	1(5.6)	11(61.1)	5(27.8)	1(5.6)
まあ理解	3(3.0)	48(47.5)	48(47.5)	2(2.0)
あまり理解できず	0(0.0)	2(10.0)	17(85.0)	1(5.0)
不理解	0(0.0)	1(12.5)	2(25.0)	5(62.5)

Table3. The relationship between comprehension rates and thinking effort during lectures

	N(%)			
	よく考えた	まあ考えた	あまり考えず	全く考えず
よく理解した	2(13.3)	10(66.7)	2(13.3)	1(6.7)
まあ理解	2(2.2)	34(38.2)	53(59.6)	0(0.0)
あまり理解できず	0(0.0)	17(44.7)	16(42.1)	5(13.2)
不理解	0(0.0)	1(20.0)	1(20.0)	3(60.0)

Table4. The relationship between comprehension rates and napping in class

	N(%)			
	よく理解した	まあ理解	あまり理解できず	不理解
全く寝てない	1(4.3)	13(56.5)	8(34.8)	1(4.3)
少し寝た	3(3.2)	42(44.7)	47(50.0)	2(2.1)
かなり寝た	0(0.0)	7(25.0)	17(60.7)	4(14.3)
大いに寝た	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)

の割合が高いが、段階4(よく理解)を比べるとその比率は低い。なお“全く考えず”では9名いるが、88.9%のものが理解に否定的である。(table 3)

4) 講義の理解と居眠りの関係について

講義理解と居眠りの関係をみると、まず、“全く寝てない”ものは全部で23名いるが、そのうち60.9%のものが理解に肯定的である。つぎに“少し寝た”ものは94名いるが、47.9%が講義理解に肯定的である。さらに“かなり寝た”ものは28名であるが、うち25%が講義の理解に肯定的である。なお、“大いに寝た”では全員が「不理解」である。このように、居眠りと理解度の間には関連性があるといえる。(table 4)

5) 講義における得たものと理解度の関係について

講義で得るものが“あった”と回答したものは33名いるが、講義の理解に肯定的なものが締め

て75.8%であった。“まああった”は、76名いるが、理解に肯定的なものは46.1%である。逆に“あまりなかった”ものは29名いるが、その理解率は20.7%であった。さらに、講義で得るものが全く“なかった”ものは9名いるが全員が講義理解に否定的である。ここでも、当然のことではあるが、講義を理解できないものは、講義から得るものもないといえる。(table 5)

6) 講義における得たものと傾聴意欲の関係について

得たものの有無と傾聴意欲との関係は、得たものが“あった”ものは、全部で33名いるが、うち97.0%のものが講義を傾聴することに肯定的である。つぎに、得るものが“まああった”を選んだものは、76名いるが、85.5%のものが傾聴に肯定的である。逆に、得るものが“あまりなかった”ものは29名いるが、うち62.1%が傾聴に肯定的である。さらに、得るものが全く“なかった”ものは9名いるが、44.4%のものが傾聴に肯定的

Table5. The relationship between comprehension rates and student perception of lecture benefits

	N(%)			
	あった	まああった	あまりなかった	なかった
よく理解した	3(75.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
まあ理解	22(35.5)	34(54.8)	6(9.7)	0(0.0)
あまり理解できず	8(11.1)	41(56.9)	20(27.8)	3(4.2)
不理解	0(0.0)	0(0.0)	3(33.3)	6(66.7)

Table6. The relationship between the listening will and student perception of lecture benefits

	N(%)			
	あった	まああった	あまりなかった	なかった
心掛けた	7(38.9)	9(50.0)	1(5.6)	1(5.6)
まあ心掛けた	25(24.8)	56(55.4)	17(16.8)	3(3.0)
あまり心掛けず	1(5.0)	9(45.0)	9(45.0)	1(5.0)
心掛けず	0(0.0)	2(25.0)	2(25.0)	4(50.0)

Table7. The relationship between the thinking effort and student perception of lecture benefits

	N(%)			
	あった	まああった	あまりなかった	なかった
よく考えた	10(66.7)	4(26.7)	0(0.0)	1(6.7)
まあ考えた	20(22.5)	56(62.9)	11(12.4)	2(2.2)
あまり考えず	3(7.9)	15(39.5)	17(44.7)	3(7.9)
全く考えず	0(0.0)	1(20.0)	1(20.0)	3(60.0)

である。概して、傾聴意欲のあるものの方が講義で何かを得ている比率が高いといえる。(table 6)

7) 得たものと思考努力の関係について

まず、得るものが“あった”と回答したものは全部で33名いるが、そのうち90.9%のものが講義中考える努力をしている。つぎに、得るものが“まああった”ものは全部で76名いるが、うち80.0%のものが考えながら聞くのに肯定的である。逆に、得るのが“あまりなかった”ものは29名いるが、うち考えて聞くことに否定的なものが62.1%を占めている。さらに、全く「得るものがなかった」ものは9名いるが、うち66.7%のものが傾聴に否定的である。やはり、考えて講義を聞いているものの方が講義の有用感の高い傾向にあるといえる。(table 7)

IV. 結語

本学部の学生はその大多数がスポーツ実施に興味関心があり、体を動かすことには慣れているが、物事を深く考えるというトレーニングが不足がちである。そのため、SKKの講義でも、初めて出会う用語や概念が大部分で、講義で一回だけ聞いてもなかなか理解が難しいのは了解できる。そのため重要事項はできるだけ繰り返して話し、具体例を示して説明はしているが、それでもよく理解できるものは少数であることが現実である。多く

が一応理解のレベルに留まっている。その中で講義から有益な情報を得ているものは、当然のことだが意欲の問題ということになる。講義をただ受身的に聞くだけでなく、考えながら聞くことも不可欠である。本講義における、理解度、傾聴意欲、思考努力の間には緊密な関連があることが明らかになったが、これはいわば当たり前のことである。人間、当たり前のことを当たり前にできることが物事をなすためには欠かせない。今回の調査研究で得られた知見をもとに、さらなる講義内容改善と指導方法に創意工夫を凝らして授業に臨みたい。

文献

- 1) 深田和範 (2010) マネジメント信仰が会社を滅ぼす 新潮社
- 2) 岩崎夏海 (2010) もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら ダイアモンド社
- 3) 豊村伊一郎 (2010)、専門講義の授業分析：スポーツ経営管理学のケース、福岡大学スポーツ科学研究 第41巻第1号 pp.21-32
- 4) 宇土正彦・八代勉・中村平 (1992) 体育経営管理学 大修館 pp.99-101.

SKK 最終資料（一生涯：保存しておく）

担当：豊村先生の遺言

H24(2012) 1 月 辰年

人間は忘れる動物（必要なことを、忘れずに自分の生活に生かすためには、定期的思い起こして、心に刻み直す習慣をつける。そしてまた実践をつづける）

質問！：今、この教室(1021)に君がいるのはなぜ？

君が物心ついて、自分で“考え”、“行動”してきた結果今、ここにいる。
今後、10 年後、20 年後、30 年後、、、50 年後、君がこの世に生きている限り、どこかにいるが、それは、其のときまでに自分で「何を考え、どう行動したか」の結果であり、すべて自己責任である。Heaven helps those who help themselves.

Hilf dir selbst, so hilft dir Gott。天は自ら助くるものを助く
人に頼らず一生懸命努力している者には天が味方する

『成果をあげる人とあげない人の差は、“才能”ではない！
いくつかの「習慣的な姿勢」と「基礎的な方法」を身につけているかどうかの問題である』（ドラッカー）
マネジメント(Management)の基本は Self-management(自己管理)である。
学ぶ姿勢を身につける。得た知識は常に実践に結び付けるよう、常に心掛ける(keep in mind)

経験の中でさらに学ぶ

必要な場合には、物事を、自分で徹底的に考える(知恵を絞る)→習慣をつける
人生、仕事、スポーツ etc: 目的・目標の設定が不可欠 目的意識、問題意識をもって生きる
良いことは習慣(癖)にする

「意思決定」が未来をつくる。「目標」が成長を促す「計画」が実現性を高める
“組織”においては、単なる「人」では駄目! 「人材」を目指す 人材とは役立つ人、必要とされる人
“人間力”(知識、技能、心)を高めるものがすべて勉強→生涯を通じて学ぶ
時間をいかに使うか? すべての人間に 24 時間が与えられている。

それを何に使うか? でちがってくる。→Time Management

※最も困難なことは「努力すること」そのもの、それを如何に楽しくやれるか
(努力することが当たり前の人は、それを努力とは思っていない)

×もしも、上の文章が今、よく理解出来ない(ビンと来ない)人でも、いつも読んでいたら、必ず 身に染みて分かる ときがくる(反復なしには“能力”は育たない)
(私の信念: いつも心掛けていたらそうなれる! たとえ今は非力でも、、、)

能力とは: something that you are able to do